慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Plusを用いる比較級構文をめぐって
Sub Title	A propos de la construction comparativeen plus
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.67, (1995. 3) ,p.156(231)- 168(219)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	七字慶紀, 若林眞両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Plusを用いる比較級構文をめぐって（*）

川　口　順　二

0．はじめに

本稿はplusを用いる優等比較級構文を甲，乙，丙の３類に分類し，度合いと階層の概念を用いてそのうちの２類を分析することを目的とする．1.で分類の提出，次に２．で乙類をplutôtと比較しながら分析し，3.で丙類を乙類と対比させて考察する．なおmoinsを用いる劣等比較級構文やaussiを用いる同等比較級構文は優等比較級構文と共通点を多く示すが本稿では扱わないので，以下比較級構文は優等比較級構文のみを指すこととする．

1．比較級構文の３つのタイプ

比較級構文にはさまざまな種類があるが，ここではその内３つのタイプを考察する．その内最も頻繁に用いられ又研究されるのは

(1) Jean est plus grand que Marie

のようなタイプで，これを甲類と呼んで

(2) A plus p que B

と表記しよう．対象"Jean" = Aの性質"grand" = p（これをA(p)とする）と対象"Marie" = B の性質"grand" = p（これをB(p)とする）は同一のpだがこの度合いを比べてA(p)の方がB(p)よりも高い度合いであると述べるのが(1)である．対象のA とBは必ずしも異なる存在物ではない．例えば

(3) Jean est plus gros qu'(il n'était) il y a 2 ans

(4) Jean est plus grand que je n'ai pensé (qu'il était)

では，Aの性質pについて２つの時点に於ける比較，または現実値と期待値の比較が行われている．従って２つの対象A，Bというのは曖昧だが，重要な点は同一の性質について２つの度合いが比較されることである．

次の乙類比較級構文は甲類と大きく異なる．

(5) Paul est plus bête que (il n'est) méchant

この例は対象"Paul" = Aについて"bête" = pと"méchant" = qという２つの性質を考慮し，どちらがより適切なのかを語るものだが，Aの性質pとBの性質qを比較することも可能である：

(6) Pierre est plus déprimé que Marie n'est exaltée

(5)の例はたまたまAとBが同一対象を指したが，より一般的に乙類は

(7) A plus p que B q

と表記できる．(1)-(4)の甲類と(5)-(7)の乙類との違いは，前者が一つの性質pについてその二つの生起に於ける度合いを比べるのに対し，後者は二つの異なる性質の二つの生起に於ける度合いを比べるという点にある．

３つ目のタイプ（丙類）は

(8) Pierre est plus que méchant

に例示されるもので，対応する表記は

(9) A plus que q

である．(7)は「意地悪を超えてそれ以上だ（もっとひどい）」と訳せる．

甲類の比較級構文ではplus p que BのBが先行文脈や発話の場で明らかな場合queと一緒に省略することが可能である．従って(1)は

(10) Jean est plus grand (que Marie)

として括弧内を省略できる．このことを

(11) A plus p (que B)

と表記しよう．乙類ではこれが不可能で，

(12) Jean est plus grand (que Marie n'est grosse)

の括弧内を省略すると(10)のような甲類として解釈されてしまう．つまり星印*を括弧の外に置いて省略の非文法性を示せば

(13) A plus p *(que B q)

となるのである．ただし(5)のようにAとBが時空間的に同一な対象を指すときは(que B p)のBを省略できる．(8)の丙類でpが現われ得ないことは星印*を括弧の内側に入れて次のように表わせる．

(14) A plus (*p) que q

３つの比較級構文の表記をまとめると次のようになる．

(15) 甲類 A plus p (que B): 「AはBよりもp」

(16) 乙類 A plus p *(que B q): 「Bがqである以上にAはp」

(17) 丙類 A plus (*p) que q: 「Aはq以上（qどころではない）」

２．乙類比較級構文とplutôt

Plutôtはしばしばplusと類似した解釈があるとされる．しかし甲，乙，丙の３類の比較級構文のうち甲類の(1)はplutôtでplusを置き換えると

(18) *Jean est plutôt grand que Marie

のよに非文になる．乙類の(5)は

(19) Jean est plutôt bête que méchant

と変わり文法的には適正な文が得られる．丙類ではplutôtでの置き換えが不可能で，(8)は

(20) *Pierre est plutôt que méchant

となってしまう．比較級構文には上記３類にも色々なサブ・タイプが，又これら以外のタイプもあるが，plutôtとの置き換えを許さないことが多い．いくつか例を挙げよう．

(21) Nous avons vu plus/*plutôt haut que... (cf. Kawaguchi(1994))

(22) Il habite un peu plus/*plutôt près

(23) On ne trouvera pas plus/*plutôt grand (Cf. Noailly(1993))

(24) Il désire toujours plus/*plutôt

(25) Un peu plus/*plutôt le train déraillait

ここには甲類の例と見なせるものもあるが，(22)や(25)に現われるplutôtと程度表現との非共起性など注目される．以下では比較級構文乙類とplutôt

構文との比較を中心に置いて議論を進める.

Rivara(1990:100)は乙類についてこれが対象や出来事の性質を比較するのではなく，むしろpとqのいずれがより高い度合いの真実性を持つのか，つまりいずれがより事実に適合しているのかを比較する構文であると主張して，これをメタ言語的比較と呼んだ.

それに対してAbe(1993:13)は２つの項pのqについて期待値としてのqを排除してpを選択することを示すのがこの構文の機能であり，甲類の様に同一の性質スケール上の２つの度合いを問題にするタイプとは異なるものだと主張する．その根拠としてAbe(*id*.:11-2)は

(26) On parle beaucoup des horreurs sublimes de la vallée qui conduit à la Chartreuse; mais, pour ceux qui ont vu de véritables horreurs, elle est *plus belle que terrible*

の様な例でpとqが方向性が逆で全くかけ離れた性質を示すことに注目する．同一スケール上に位置しないような対義語を度合いの観点から比較するというのは無意味で，むしろ二者択一がこの構文の機能だと見なすのである.

一般に比較級構文は何らかの性質に基づいて２つの項を比較する．この項は対象（存在物），性質，事行などさまざまなものが考えられるが，いずれにせよ基準となる項と比べて比較対象となる項の方が問題となる性質をより高い数量・程度に持っていることが言われる．甲類では(1)のように１つの性質pのA(p)とB(p)という２つの生起がpの程度によって比較される．丙類は後述するようにある対象Aが程度と性質の２面から性質qに対してどのような位置を占めるのかが表わされる．乙類はp，qという異なる２つの性質の生起を比較するが，p，qが異なる性質のために共通するものを設定する必要がある．Rivaraはこの共通要素を事実性の程度と捉えたわけで，Abeは選択という概念で説明しようとした．AbeはA とBが同一対象のケースしか扱っていないが，確かに乙類は圧倒的にこのケースが多い.

さて今までは性質p,qが形容詞表現の例を見てきた．動詞文でも甲，乙，丙３類があるが，特に乙類では動詞文の観察が形容詞文の性格を考える上

で有益である．次の例では

(27) Jean achète plus de bière que Paul ne vend de vin

A(p)がJean achète de la bière，B(q)がPaul vend du vinである．ところがこの文の最も自然な解釈は「ポールが売るワインの量以上の量のビールををジャンが買う」であり，「ポールがワインを買うというよりもむしろジャンがビールを売るのだ」というような解釈は考えられない．この最後の解釈こそ「メタ言語的」と呼ぶにふさわしいものだが，これはplusをplutôtで置き換えてqueの前に置くことで初めて出てくる解釈である．またB(q)は比較の基準として提出されているが否定されるわけではない．これの否定，排除によるA(p)の選択という解釈を取るにはplutôtでplusを置き換えなければならない．同様に

(28) Jean boit plus de bière que Paul ne boit de vin

でも量比較の解釈が自然である．動詞句の他のタイプも見ておこう．

(29) Jean reçoit plus qu'il ne donne

(30) Jean va plus au cinéma que Paul ne rend visite à son amie

(29)は動詞目的語が現われない例なので内的目的語としてdu recevableとかdu donnableを想定する解釈では目的語の数量比較が語られており，またA(p)とB(q)の回数，頻度が比較されているという解釈も可能である．(30)は事行の性質上回数の比較である．次に

(31) ?Jean se meurt plus qu'il ne vit

は「ジャンは生きているというよりはむしろ瀕死の状態だ」という解釈を考えることが不可能ではなくメタ言語的用法に見えるが，これは事行の性質上内的目的語も立てにくく頻度の解釈もむずかしいので程度解釈が出てこざるを得ないという理由に依る．そしてこの程度解釈でのみ形容詞文と類似の解釈となる．

動詞文の場合数量解釈が目的語（または内的目的語）の数量や事行の頻度に関わるので程度に関わることは比較的少ないと考えられる．形容詞文では逆に目的語が想定しにくく頻度解釈も取りにくい．むしろ程度解釈が

最も自然で，この時動詞文と同様にB(q)は否定の対象にはならないと考えられる．つまり

(5) Paul est plus bête qu'il n'est méchant

の例ではA = Bだが，B(q)の程度はØ（ゼロ）ではなく，正の値を持つと解釈するのである．plutôtでplusを置き換えるとB(q)がØの値を取れ，「悪者というよりむしろ馬鹿なのだ」という選択解釈が可能になるが，plusを用いると「悪者かもしれないがいずれにしろそれ以上に馬鹿だ」の解釈となる．動詞文，例えば

(32) Jean a acheté plus qu'il n'a vendu

は時空間的に特定されるある１つの行為については言うことができない．つまりジャンがした行為についてそれが売る行為であるというよりもむしろ買う行為だったという選択解釈を得るためにはplutôtを用いるのであり，plusは買った数量が売った数量より多かったとか，買った回数が売った回数より多かったという数量解釈しか提供しない．これと平行して，(31)でも「ポールは悪人だ」というB(q)と「ポールは馬鹿だ」というA(p)の程度が問題とされるのである．B(q)についてはその程度がØではない，と表現してきたが，より正確には「B(q)の程度がØではないという見方を一応許容する」と言うべきだろう．このことはB(q)の構築主体と比較級構文A plus p que B qの断定主体との関係に関わってくる．

B(q)は比較の基準項として機能するもので，A(p)はあくまでB(q)と照らし合わせた上で数量，頻度，程度などがより高いとする．形容詞文では事行を程度以外で数量化するのが困難で，例えば「ジャンは悪人だ」という内容は「ジャンは（目盛り上で）x度／（頻度で）x回悪人だ」のような解釈を取りにくい．ジャンの性質として全体的に捉えるのであって，ここから数量化が程度解釈として現われるというのが先に述べた仮説である．しかしこのような相違を除けば乙類形容詞文は動詞文と異ならず，特にB(q)の基準項という特性は有効である．

このB(q)の構築主体が文全体の断定主体と異なるケースは良くある．こ

の場合断定主体はB(q)が自分の考えであるか否かを括弧の中に入れてしまい，とりあえずはB(q)を許容する．つまりその程度が正の値であり∅ではないという判断，主張に賛成しないまでも一応は認めておいて，そしてそれを認めたとしてもいずれにしろA(p)の程度の方が高いと断定するわけである．B(q)は比較の基準にしか過ぎず，一応認めさえすれば十分であるが，断定主体がB(q)を自分の意見として持っていても良い．この時B(q)の構築主体と文の断定主体は一致することになる．むしろこの２つの主体を先に立てておいて，２つが同一のケースと相違するケースを考える方が定式化しやすいのである．構築主体が特定できない一般的主体であることもあり，これが断定主体をもメンバーとして持つこともありうる．不可能なのはB(q)を許容せず排除してしまうケースで，この時はplutôtしか用いることができないのである．

そこでA ＝ Bの時pとqが両立せずに相反する性質でしかもB(q)構築主体が文の断定主体なら乙類は成立しないという予測が立つ．実際

(33) *Pierre est plus bête que pas bête

(34) ??Pierre est plus intelligent qu'ignorant

(35) ?Dites donc, votre salle climatisée, on dirait qu'il fait plus chaud que froid

の様な文は解釈が極端に困難である．B(q)を一応にせよ許容するためにはA(p)と矛盾してはならないからである．ただし(35)のような文は断定主体と異なるB(q)構築主体に対する反論，揶揄，皮肉などの目的で断定主体がB(q)のA(p)との矛盾を示すために用いる可能性を全くは排除しにくく，許容されればAbe (1994)の乙類の解釈に当てはまる．なお(33)-(35)はplutôtを用いると適正文となるがこれも今までの記述に基づく予想を裏切らない．

以上の議論をまとめておこう．まず比較級構文乙類は（甲類と平行して）基準項B(q)が数量，頻度または程度に関して∅ではなく正の値を持つと許容し，いずれにしろA(p)の数量，頻度または程度がB(q)のものより高いことを主張する．A(p)とB(q)とでいずれがより事実に適合するかという問題

は断定主体がB(q)構築主体とどのような関係を持つかに依るものであり，メタ言語的機能を受け持つのはplusよりむしろplutôtである．２項のうちの１項選択という機能はB(q)を排除するという意味ならばplutôtの機能の一部に属す．これは動詞文に於ける数量化の機能の仕方や純粋に対義語と呼べるような語彙表現がpとqを表わしている時の文の振る舞いによって裏づけられる．ただし主体間関係のパラメーターが介入すると選択に近い解釈の出現もありうる．

丙類は乙類と同様に基準項に性質qが来るが，解釈は大きく異なる．節を改めてその議論に移ろう．

３．丙類の解釈

丙類はすでに見たように

(36) Pierre est plus que méchant (= (8))

のような構文で，その特徴は甲，乙類と異なりpが現われないことである．これはpが現われると乙類になってしまうから当然である．また(17)で示したが，丙類は対象がAだけでBを想定できない．解釈の観点から見ると「Aはq以上である」ということはAがqを超える何らかの性質または程度を持っていることであり，この性質または程度がplus que qで表現されている．次の実例を観察しよう．

(37) --C'est *un ami*, dit-il.
Et parce que le vin le rendait emphatique, il ajouta, appuyant sur les syllabes avec une obstination d'ivrogne:
--C'est *mon meilleur ami*... C'est *plus qu'un ami*... C'est *un frère*, tu entends? (Simenon, *Œil*: 61)

qの位置に来ているのは属詞名詞である．ここで階層gradationを導入しよう．「友人」という概念を数量化する時は人数を数えるような外延的数量化と友人度（どの位友人と呼べるのか）を測るような程度の数量化がある．階層とは程度の数量化に関わるもので，「友人」を取ると「名前だけの友人」，「友人といえなくはない友人」，「良友」，「親友」，「真の友」

のように様々な度合いがある．(36)ではun amiの後にmon meilleur amiが出ていて，単なる友人から最良の，最も友人と呼ぶにふさわしい友人へと度合いが高まっている．そしてその直後に「友人以上だ」がplus que qで表わされ，それでは何なのかというと「兄弟だ」とされる．この「兄弟」がpに当たるわけで，丙類は乙類につながってくる．ただし乙類では

(38) Il est plus mon frère que (il n'est) mon meilleur ami

のような形が想定されるが，これは(37)と同じ解釈ではない．もう１つ例を挙げよう．

(39) J'aime Molière. Même quand il fait des vers, c'est aussi fantassin que de la prose. Il est *universel* parce qu'il est *tellement français* qu'il est *plus que français*. (J. Laurent, *Miroir*: 290)

ここでも「フランス的」という性質の程度の高さが「フランス的以上」に及ぶことと，そしてそれが「普遍的」であることが述べられていて，階層解釈が明快に現われている．これを乙類に書き換えると

(40) Il est plus universel que français

となるが，(36)-(37)と同様乙類と丙類の間に解釈のずれが観察される．乙類(39)ではpの程度をq の程度と比較してより高いと述べているのであり，pの程度についてはこれ以上の情報は与えられていない．ところが丙類(39)ではA(p)が比較級構文の外で述べられているのであり，その程度は比較に立脚したものではない．このような場合pは典型的，中心的な値に向かう方向性を付与される．実際

(41) Il est universel

と断定すれば他に何らかの指定がない限りAはpという性質の中心的値に近い度合いを備えていると解釈される．乙類はこのような解釈を取りにくい．これは前節で示した乙類の分析からも予測できたことである．そこではB(q)の程度が∅ではなく正の値を持つと述べたが，pとqとが異なる性質を示すために２つの程度の相対評価が行われ，B(q)の程度がいかに高かろうと低かろうといずれにしろA(p)の程度の方がより高いと断定するのが乙

類の解釈であった．A(q)を提示する丙類の比較級構文の文脈内でA(p)が断定される場合は，A(q)の程度が正の値として存在すると言うだけはでなく，A(q)の程度をいかに高いものとしてもそれではAの性格づけの意を尽くさないとして，それを超える度合いをpで提示するわけである．

従って丙類の文には乙類への書き換えが考えられないものも出てくる．例えば

(42) *Plus représentatif qu'original*, nourri d'une tradition remontant à Polybe, viscéralement attaché à l'anarchie barbare, Ammien Marcellin renonce à proclamer l'utilité de l'histoire. (Bourdé & Martin: *Les écoles historiques*: 38)

がその例で，これを同じ文脈内で

(43) *A. Marcellin est *plus qu'original*; il est *représentatif*

とするとほぼ解釈不可能になる．というのも「独創的」という性質と同じ方向でしかもより高い度合いの性質提示が必要なのにも拘わらず，他の歴史著述家たちの態度を総合的に具現しているという意味で「代表的」ということは独創性に至るどころかその逆の性質だからである．乙類ではこの場合B(q)を容認しながらもそれに加えてA(p)をより高い程度の性質として提出するので矛盾は解消される．

丙類ではpを比較級構文内で表現しないが(37)や(39)の例のように文脈で明示されることは少なくない．qとpの関係を(q→p)で示すと(39)は(français→universel)となる．Discotextから抽出したコーパスにはp，qが名詞や動詞の例が多かったが例を示そう．

(44) (de l'hostoire→de l'épopée), (la justice→la bonté), (de la bienséance→du courage), (du dévouement→de l'obéissance), (des probabilités→des certitudes), (de la gloire→du bonheur);
(me déplaire→me révolter), (vous le permettre→vous y exhorter), frémir→pâlir), (les détester→les mépriser)

(45) il faut *plus que des probabilité*, il faut *des certitudes* pour accepter un duel à mort avec un ami (A. Dumas, *DT*)

(46) --[...] je m'ennuie parfois des camarades; ce n'est pas comme toi, sans

cœur, qui voudrait ne jamais les revoir!

Andrea fit *plus que frémir* cette fois, il *pâlit*. (A. Dumas, *DT*)

次の例では(utilité réduite→(utilité nulle)→douleureux pour la famille)のような階層を想定できよう.

(47) Elle détestait les enterrements. Elle n'était même pas allée à celui de son père. Elle ne comprenait pas pourquoi des groupes silencieux s'obstinaient à suivre des cadavres. L'utilité en était *plus que réduite*. Tout devenait plus douleureux pour la famille, obligée de se donner en spectacle. (C. Soula, *Bourse*: 94)

しかしqが副詞の次の例ではplus que qの解釈が文脈に示されるわけではない.

(48) Mais oui, madame, je suis Français... Et nous allons *plus que probablement* faire la traversée ensemble... (Simenon, *Escale*: 131)

常にqよりも高い度合いの性質を想定させる丙類はpが文脈に現われないことも多いが解釈が不明になるということはない. 次に挙げる「名詞＋plus que＋形容詞」の例を見ればこの点は明らかである.

(49) une fortune plus que suffisante; les propos plus que simples de ces soldats; des cheveux d'un blond plus que hasardé; ces lieux plus que modestes; une beauté plus que contestable; une exécution plus que médiocre (*DT*)

丙類を説明するには文脈に出てこなくともp を想定する必要がある. より正確にはplus que qから（必ずしも語彙化されない）pを引き出す解釈規則が要求されるのである. そのためにはqとそしてqよりも高い度合いの性質p 含む階層を構築する. 次の例で考えよう.

(50) La conversation qui avait repris tournait autour des dernières expositions et comme on en était venu à celle de Fragonard, le baron s'étonna que Mme Hallein n'eût pas prêté son tableau.

--J'ai ici assez de beaux machins, répondit-elle, pour reconnaître que ce Fragonard est douteux, *plus que douteux*, mais il me plaît et c'est l'essentiel. (J.Laurent, *Miroir* : 34)

q = "douteux"から出発してそれより高い度合いを含む階層を構築し，そし

てA(p)とするわけだが，qの方向づけられたさまざまな度合い(peu/un peu /assez/très... /vraiment douteux)を超えてより高い度合いを求めることはqの領域から出て異なる他の領域にAを位置づけることになる．つまり単により高い度合いというだけでは不十分で，質的に異なるpが要求される．「疑わしいという領域を通り超した性質」は「贋物」fuaxの領域に入る．例文のplus que douteux はmême fauxと置き換えられないこともないが，ニュアンスの違いがある．比較級構文についての一般的仮説からqを超えるような性質が問題になってはいるもののqは排除されるのではなく，qをAの性質として認めた上でしかもそれに優る性質をAに付与するのが丙類の機能と考えたい．

(44)のリストにはqからpを引き出すことが文脈なしには不可能なケースがある．例えば(de la bienséance →du courage)は次の文脈を見て初めて理解できる．

(51) M. Morrel pourvut à tous les frais de son enterrement et paya les pauvres petites dettes que le vieillard avait faites pendant sa maladie. Il y avait *plus que de la bienséance* à agir ainsi, il y avait *du courage*. Le Midi était en feu, et secourir, même à son lit de mort, le père d'un bonapartiste aussi dangereux que Dantès était un crime. (A. Dumas, *DT*)

「qとは異なるより高い度合いを持つ性質」の構築にはqとqより高い度合いの性質をも含む階層が必要であり，そして階層全体が何らかの共通な性質を持っていなければならない．この性質を「スーパー・プレディケート」と呼ぼう．(51)では老人の死後の世話をすることが一方ではq =「社会的に望ましいと認められることをする」という性質を持つが同時にそれ以上でもあり，それはp =「官憲の追及を受ける可能性のあることを信念に基づいてあえてする」という性質を持つことである．スーパー・プレディケートが人間の行為に関しての倫理的評価の領域であり，qの社会的規範に則った領域と，そしてplus que qでのそれを超えてより個人的な価値の領域とで構成されていることが文脈全体から理解されるが，スーパー・プレディ

ケートの領域設定はこのように文脈の中で行われると考えられる．丙類比較級構文は性質と程度を総合する階層に支えられているのである．

4．結語

本稿ではplusを用いる比較級構文を３類に分けてそのうちA plus p que qの乙類とA plus que qの丙類の２つについて，度合いと階層の概念と，そしてqの程度の値が正であるという仮説に基づいて分析を試みた．丙類は否定の問題など未だに不明な部分が多い．今後の課題としたい．

(*) 本稿の作成に当たって藤田知子，阿部宏両氏と議論をする機会を得た．またF. Sakai,A.Watanabe両氏にはインフォーマントとして例文をチェックして頂いた．各氏に感謝を表したい．

【参考文献】

ABE, H. (1994): ""Degré" et "choix" dans la locution *plus ou moins*", 『日仏語対象研究論集』，日仏語対照研究会.

BRANDT, P.A.(1992): "Vers une dynamique de la quantification", in Fontanille(éd.).

CULIOLI, A.(1990): *Pour une linguistique de l'énonciation---Opérations et représentations*, tome 1, Ophrys.

CULIOLI, A.(1992a): "Un si gentil jeune homme! et autres énoncés", *L'information grammaticale*, 55.

CULIOLI, A.(1992b): "Quantité et qualité dans l'énoncé exclamatif", in FONTANILLE(éd.).

FONTANILLE, J.(éd.)(1992): *La quantité et ses modulations qualitatives*, Limoges, PULIM.

FUCHS, C.(1992): "Modulations qualitatives sur l'itération, les emplois concurrentiels de *encore* et *re-*", in Fontanille(éd.)

FUJITA, T.(à paraître): "A propos de *tant* intensif".

KAWAGUCHI, J.(1993): 「plutôtと多義性について」，*BELF*, 27.

KAWAGUCHI, J.(1994): "Référence intratextuelle déictique, référence intertextuelle et localisation comparative", 『日仏語対象研究論集』，日仏語対照研究会.

NOAILLY, M.(1993): "Sur un étrange privilège des adjectifs au comparatif", *L'information grammaticale*, 58.

RIVARA, R.(1990): *Le système de la comparaison: sur la construction du sens dans les langues naturelles*, Paris, Minuit.

RIVARA, R.(1993): "Adjectifs et structures sémantiques scalaires", *L'information grammaticale*, 58.